

# 高齢者の自己概念の研究

草野加奈未

## 〔抄 録〕

本研究の目的は、文章完成法テストを用いて高齢者の自己概念の調査を行い、高齢者とかかわる上での課題を検討することであった。「数量的分析」では、77名の対象者のSCT反応を肯定・中立・否定に分類し、年齢・居住環境・配偶者の有無・性別に分けて $\chi^2$ 検定を行った。結果は、自己概念は加齢により変化するものではなく個人の生き方によるものであること、身体の衰えや配偶者との死別体験は未来や生きることと否定的につながること、男性は戦争や退職のライフイベントが自己概念に密接に関わっていることが挙げられた。

さらに、特徴が表れている3名の対象者のSCT反応を「質的分析」することで、一人ひとりの反応から個々の課題を考え、これからの高齢社会について考察した。私たちは、高齢者一人ひとりが豊かに生きていくために、何ができるか、そして自分がその立場であったなら何をしてもらいたいのか、一人ひとりのSCTにおける反応（語り）から、様々な可能性を考え、推測した。

キーワード 高齢者, 自己概念, 文章完成法テスト (SCT), 喪失感

## 第1章 問題と目的

### 第1節 高齢者の特徴

人間は誕生してから死ぬまで生涯をかけて発達を続ける存在である。Erikson (1986/1990) は、人間のライフサイクルを8つの段階に分け、心理社会的発達論を発展させた<sup>(1)</sup>。さらにErikson (1986/1990) は、ライフサイクルの各段階において、それ以前の段階で優位にあった心理社会的課題を、その年齢にふさわしい新しいやり方で再統合していかなければならないと述べている<sup>(1)</sup>。そして、8段階の最終段階である「老年期」の課題は「統合対絶望」であるとした。この老年期に属するのが、一般に「高齢者」と呼ばれる人々である。

「高齢者」とは、WHO (World Health Organization) の定義では65歳以上の人をさす。我が国では一般に65歳から74歳までを「前期高齢者」、75歳以上を「後期高齢者」と区分してい

る。しかし、平均寿命が伸びている昨今、「高齢者」と定義すると年代の幅が広くなりすぎる。そのため、古谷野（2002）は55歳から74歳までを「前期高齢者」、75歳から84歳を「後期高齢者」、85歳以上を「超高齢者」と区分している<sup>[2]</sup>。本研究では、定年退職する年齢である60歳以上の者を「高齢者」と定義し、75歳までを「低年齢群」、76歳以上の者を「高年齢群」とした。

我が国の平均寿命は厚生労働省の平成20年簡易生命表によると、男性が79.29歳、女性が86.05歳である。このことはWHOの加盟国の中で最も平均寿命が高いことを示す。今後さらに、国内の平均寿命は伸び続け、2055年には、男性83.67歳、女性90.34歳になると予測されている。これは、「高齢者」と一括りに定義される人が増えるということを表している。高齢者の年齢・居住環境・健康状態・生育歴・性別などは一人ひとりが異なるということを再度認識し直し、「高齢者」だからと一括りにしてしまうことで見落としがちな、個人に目を向け、一人ひとりの課題を知ろうとする必要がある。次の節では、高齢者の暮らす居住環境に焦点を当て、高齢者がどのような暮らしをしているのかを考える。

## 第2節 施設と在宅

高齢者の利用する施設には「入所施設」と「利用施設」がある。「入所施設」とは、特別養護老人ホーム・養護老人ホーム・ケアハウス・老人短期入所施設・有料老人ホーム等をさし、「利用施設」とは、老人デイサービスセンター・老人福祉センター・老人休養ホーム等をさす。

「特別養護老人ホーム」は、利用者は65歳以上の者であって、身体上または精神上著しい障害があるため、介護を必要とする者である。居宅において適切な介護を受けることが困難な者が利用する施設で、日常生活上の機能訓練や健康管理などを行っている。「有料老人ホーム」は、入浴・排泄・食事介助・食事の提供・その他日常生活に必要な便宜を提供する施設である。「老人デイサービスセンター」は、要支援・要介護の65歳以上の、身体上または精神上的の障害があるために日常生活を営むのに支障のある利用者が通い、入浴・排泄・食事等の介護・機能訓練や介護方法の指導等を提供する施設である。このように、利用者のニーズに応じて「施設」と呼ばれるものにも様々な種類がある。

本研究では、特別養護老人ホーム・有料老人ホームの利用者を施設で集団生活をしている「施設群」とし、老人デイサービスセンターの利用者を居宅から施設に通う「デイサービス群（デイ群）」と定義した。さらに、施設を利用せずに在宅で生活している高齢者を「在宅群」と定義した。今回、在宅に住んでいる対象者の中でも、他者とのかわりが定期的にある「デイ群」とかわりが定期的でない「在宅群」に分類をした。高齢者の暮らす環境によって、個々の課題が異なるのかを検討するために、本研究では3群に分類した。次の節では、喪失体験に焦点をあて、体験の違いから高齢者を考える。

### 第3節 喪失感

Erikson (1982/2005)は、老いるということは偉大な特権である。それによって長い人生を振り返り、振り返りつつその人生を追体験できるとしている<sup>(1)</sup>。一般に、年を重ねるごとに喪失する物事は増加するがその喪失は「生物的喪失」「社会的喪失」「時間的喪失」に分類される。「生物的喪失」とは身体の衰えや老化によるもの、「社会的喪失」とは現役から退くことや社会的な地位がなくなるというライフイベントによるもの、「時間的喪失」とは未来や死といった時間に関係する喪失といわれる。このような喪失は少なからず誰もが体験することで、特に老年期には避けては通れない問題である。しかし、中西・鑑 (1981)は喪失を悲観的に捉えるのではなく、現在の一日一日を充実させて、その積重ねで残りの人生を充実させることにより、心の中に不安の入り込む余地をなくし、あるがままの自分を好意的に受け入れることができるようになってくるとしている<sup>(2)</sup>。

そこで本研究では、「失ってさみしいもの」と「たいせつなもの」を尋ねることで、高齢者の喪失感を捉えることとした。そして、研究を通して得られた情報から、個々が体験した喪失体験に向き合うことで、今後の高齢者との関わり方を改めて考える。対象者には自分自身と向き合うことを課すこととなる。そこで次の節では、自分自身の捉え方について考える。

### 第4節 自己概念

私たちは自分自身をどのように捉え感じているのだろうか。Newman (1988/1995)は、自分というものを伝える際の安定した考えのことを「自己概念」としており、自分を表す自己の性格・身体特徴・能力・価値観などが、発達のそれぞれの段階で異なっているとしている<sup>(3)</sup>。また梶田 (1980)は、人が外界と相互作用をし、自らの維持・強化・発展をはかっていく過程には自己概念が組み込まれているとしている<sup>(4)</sup>。

本研究では、自分自身の捉え方を「自己概念」と定義する。老年期段階の高齢者が、現在、どのような自己概念を持っているのかを知り、これまでの人生、さらにはこれからの人生をどのように捉えているのかを時系列を設定して理解していく。次の節では、高齢者の自己概念を表現してもらえるような心理検査について考える。

### 第5節 文章完成法テスト

心理検査の中でも、クライアントの性格特性を知る際に用いられるパーソナリティ検査は一般に3種類に分類される。「質問紙法」「作業検査法」「投映法」である。これらの検査の実施方法としては「集団法」や「個別法」といったものがあり、言語を用いるものや非言語のものなど、目的や場所、クライアントに合わせて実施する検査を選択しなければならない。

老年期の研究は、質問紙法や投映法で広く行われてきた。特に、心理社会的発達に関する研究は文章完成法テスト (sentence completion test : SCT) により積み重ねられてきた。

文章完成法テストとは、投映法の一つである。小林（2007）は、未完成の短文を刺激文とし、そこから連想される文章を完成させ、文章に投映された個人的特性からパーソナリティを探るという検査であると説明している<sup>(5)</sup>。解釈は「直感的な洞察」に重点をおくものと、「数量的処理」を行うものに分けられる。「直感的な洞察」は検査者の直感で解釈するもので、「数量的処理」は各項目に対する反応を病的・中立的・肯定的の3カテゴリーで採点し累加平均を適応度の指数とするものである。また佐野・楨田（1989）による精研式SCTは、数量的処理は行わず、知的側面・情意的側面・指向的側面・力動的側面を決定因子とし、身体的要因・家族的要因・社会的要因をとりあげて検討するという手法をとっている<sup>(6)</sup>。

下仲・村瀬（1975）による「老人用SCT」の研究では、33項目の刺激文の反応を肯定的反応・否定的反応・中立的反応に分類し、施設老人と居宅老人を対象に調査をしている<sup>(7)</sup>。結果は、施設老人は自分を直視することを避けようとする自己回避的な点特徴的で、居宅老人は自己に対して肯定的な認識を持ち、他者への働きかけは積極的であるとしている。

下仲・村瀬（1988）の調査を参考にし<sup>(8)</sup>、SCT-Eを作成した星野（2001）の調査では、女性は友人関係で有意に肯定的な回答が多く、時間的展望における過去の回顧も肯定的な者が多いと述べている<sup>(9)</sup>。

さらに、森（2004）の調査によると、施設高齢者は過去を振り返る傾向にあり、在宅高齢者は現在の役割を自覚している人が多いとしている<sup>(10)</sup>。また加齢の影響は、高齢者全体としては顕著でなかったとし、下仲・村瀬（1988）の調査と同様の結果を示している<sup>(8)</sup>。性差の影響は、死の態度の否定が男性で、先祖を信仰する人が女性に多いとしており、女性については協調性の志向や継続的志向がみられたと結論づけている。

SCTは対象者が問いかけに自問自答をし、自由な回答が委ねられる。そして、回答からは多様な価値観や言語表現が測定可能である。そのため、高齢者に実施することで自由な語りを促すことができ、現在の高齢者がどのようなことを考え・感じているのかを知ることが可能となると考えられる。また小林（2007）によると、SCTは面接につなげやすいとされている<sup>(5)</sup>。そのため、今後高齢者と関わる際にも重要な考察ができると推測される。そこで、本研究では老人用SCTを用いて、先行研究では扱えきれなかった高齢者の喪失感や自己概念を「数量的処理」と「直感的洞察」の2つの側面からみていく。

## 第2章 方 法

### 第1節 調査日時、場所および状況

本調査は、2008年7月30日から9月19日までの期間に実施した。特別養護老人ホーム・有料老人ホームの利用者、地域の祭り参加者、衣料品店の顧客、デイサービスの利用者を対象とした。そのため調査日時や場所は異なる。また方法は個別法・持ち帰って記入・集団法と、対象者や

状況に応じて対応をしている。

## 第2節 調査材料

調査材料として文章完成法テストを用いた。項目内容は老人用SCT (下仲・村瀬, 1975)<sup>(7)</sup>の33項目に、「私が失ってさみしいと思うものは…」 「私の大切なものは…」 という新規の2項目を加えた35項目で構成されている。用紙はA4用紙、横書きで文字の大きさは20ポンド、漢字にはふりがながふってある8頁からなるテストであった。自宅や施設に持ち帰る対象者には調査用紙の入る封筒を用意した。

調査用紙は2種類あり、施設用の調査用紙には年齢・性別・在所年数・配偶者の有無・家族人数を記入する欄がある。在宅用の調査用紙には年齢・性別・配偶者の有無・家族人数を記入する欄が設けてある。

## 第3節 調査対象者

調査対象者の年齢は60～75歳が38名、76～96歳が39名であった。特別養護老人ホームの利用者10名 (男性2名, 女性8名)、有料老人ホームの利用者8名 (男性4名, 女性4名)、地域の祭りの参加者4名 (男性2名, 女性2名)、衣料品店の顧客13名 (男性1名, 女性12名)、デイサービスの利用者42名 (男性5名, 女性37名) の77名を調査対象者とした。個別法で実施した者が10名、自宅や施設に持ち帰って記入した者が65名、集団法で実施した者が2名であった。配偶者が無と答えた対象者は30名 (男性3名, 女性27名)、配偶者が有と答えた対象者は43名 (男性11名, 女性32名)、未記入が4名 (男性0名, 女性4名) であった。配偶者が無と答えた者のうち、独居の対象者は18名であった。

## 第4節 手続き

調査対象者の課題は、年齢・性別・在所年数・配偶者の有無・家族人数の必要事項を記入し、35項目の刺激文に続けて文章を完成させるというものである。文章をみて頭に最初に浮かんできたことを思ったとおりに書くように教示し、1から順番に答えるように伝えた。文章が思い浮かばない項目については番号に○をつけて後回しにし、先に進むよう教示をした。手や目が不自由で記入が難しい場合には、口頭で答えたものを調査者が代筆した。調査時間は30～60分であった。休憩は原則行わなかったが、対象者の体調などに考慮しながら、個別に対応をしている。自宅に持ち帰って記入する場合は、深く考え込まずに頭の体操と思って気楽に実施するようにという教示を加え、封筒に入れて後日持参してもらうこととした。

刺激文は35項目あり、「家族イメージ」が6項目、「友人イメージ」が2項目、「健康イメージ」が2項目、「自己の過去イメージ」が5項目、「自己の現在イメージ」6項目、「自己の未来イメージ」が3項目、「不安・懸念イメージ」が2項目、「価値イメージ」が7項目、「喪失

イメージ」が2項目である。Table 1 にイメージと質問項目を記載する。

Table 1 イメージと質問項目

家族	1 たいいの家庭にくらべると私の家庭は	未来の自己	10 これからは
	15 若い時、私の家庭は		14 いつかそのうち、私は
	21 私はきょうだいと		29 もし私が若かったら
友人	24 私の子どもは	懸念不安	9 私が気になるのは
	28 夫と私は		16 私が不安に思うことは
	31 家の人びとは、私を		
健康	2 友だちづきあいは、私にとって	価値	4 生きるということは
	22 私とよく気の合う人びとは		6 私にとって、社会（世の中）は
			12 死というものは
自己の過去	3 私の身体は		13 私がうらやましいのは
	8 年をとると		17 私が生きている喜びを感じるのは
			27 今の若い人は
自己の現在	5 若いころ、私は	喪失	32 私の人生は
	7 私が残念なのは		34 私が失ってさみしいと思うものは
	18 六十才を過ぎたら		35 私のたいせつなものは
自己の現在	23 これまでは	番号は質問紙の項目番号	
	26 よく思い出すことは		
自己の現在	11 私は、よく人から		
	19 ときどき、私は		
	20 今の私の生活は		
自己の現在	25 私の一番の弱点は		
	30 私のたのしみは		
	33 私のいいところは		

### 第3章 結果と考察

#### I. 結果全体からみた数量的分析

本研究では、対象者を年齢・居住環境・配偶者の有無・性別に分類することで、様々な角度から高齢者の自己概念を捉えていく。それぞれの群の人数の内訳をFig. 1～4に示す。

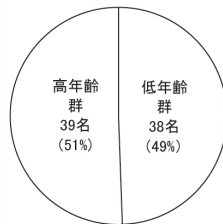


Fig. 1 年齢内訳

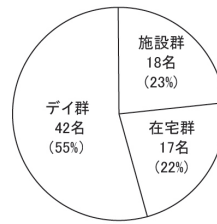


Fig. 2 居住環境内訳

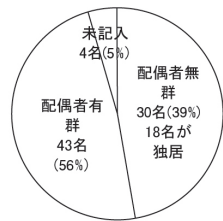


Fig. 3 配偶者有無内訳

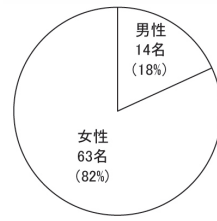


Fig. 4 性別内訳



対象者のSCTの反応は、下仲・村瀬 (1988)<sup>(8)</sup>を参考に、項目に対して積極的反応を示したものを「肯定反応」、事実や一般的な定義の反応をしたものを「中立反応」、消極的な反応をしたものを「否定反応」とした。項目内で反応が重複する場合、最も強いと思われる反応に分類をした。なお、未回答の場合はどこにも分類はしなかった。

## 第1節 年 齢

SCTの反応が年齢により差があるかを検証するため、低年齢群と高年齢群間で群(2)×反応(3)の $\chi^2$ 検定を行ったところ、「今の私の生活は…」という1項目に差がみられた ( $\chi^2=4.756$ ,  $df=2$ ,  $p<.05$ )。残差分析による結果から、低年齢群の中立反応は有意に少なく、高年齢群は有意に多かったことが示された。なお、他の項目については、差は見られなかった。結果をTable 2に示す。

この結果は、中立反応のみ差が表れているため、加齢により自己概念が変化していくとは言えない。ここから、加齢よりも個人の生き方が自己概念に影響すると考えられる。この結果は下仲・村瀬 (1975)<sup>(7)</sup>及び、森 (2004)<sup>(10)</sup>の調査結果とも一致するものであった。

Table 2 今回の私の生活は

	肯定	中立	否定
低年齢	25	1*	8
高年齢	18	6*	9

\*\* $p<.001$ , \* $p<.05$

## 第2節 居住環境

SCTの反応が居住環境により差があるかを検証するため、施設群・在宅群・デイ群間で群(3)×反応(3)の $\chi^2$ 検定を行ったところ、8項目で差がみられた。

「友だちづきあいは、私にとって…」という項目に対する反応に差がみられた ( $\chi^2=10.316$ ,  $df=4$ ,  $p<.001$ )。残差分析により施設群の肯定反応が有意に少なく、否定反応が有意に多いという結果が示された。また「若いころ、私は…」という項目に対する反応に差がみられた ( $\chi^2=12.891$ ,  $df=4$ ,  $p<.05$ )。残差分析の結果、施設群の中立反応、在宅群の否定的反応、デイ群の肯定的反応が多かった。結果をTable 3, 4に示す。

Table 3 友だちづきあいは、私にとって

	肯定	中立	否定
施設	9**	1	8**
在宅	16	0	1
デイ	33	1	7

\*\* $p<.001$ , \* $p<.05$

Table 4 若いころ、私は

	肯定	中立	否定
施設	4	10*	3
在宅	2	4	11**
デイ	16**	13	12

\*\* $p<.001$ , \* $p<.05$

「よく思い出すことは…」という項目に対する反応に差がみられた ( $\chi^2=12.479$ ,  $df=4$ ,  $p<.05$ )。残差分析の結果、施設群の肯定反応が少なく中立反応が多いこと、デイ群の中立反応が少なかったことが示された。また「私は、よく人から…」という項目に差がみられた ( $\chi^2$

=8.932, df=4,  $p<.05$ )。残差分析の結果、施設群の肯定反応が少なく否定反応が多いこと、デイ群の肯定反応が多いことが示された。結果をTable 5, 6に示す。

Table 5 よく思い出すことは

	肯定	中立	否定
施設	2*	9**	4
在宅	6	5	2
デイ	14	3**	9

\*\* $p<.001$ , \* $p<.05$

Table 6 私はよく人から

	肯定	中立	否定
施設	6**	1	6*
在宅	11	1	3
デイ	27*	0	4

\*\* $p<.001$ , \* $p<.05$

「私のたのしみは…」の項目に対して差がみられた ( $\chi^2=12.300$ , df=4,  $p<.001$ )。残差分析より、施設群の肯定反応が少なく否定反応が多いこと、デイ群の肯定反応が多く否定反応が少ない結果が得られた。また「これからは…」の項目でも差がみられた ( $\chi^2=11.128$ , df=4,  $p<.001$ )。残差分析により施設群の否定反応が有意に多い結果が得られた。結果をTable 7, 8に示す。

Table 7 私のたのしみは

	肯定	中立	否定
施設	10**	0	4**
在宅	13	0	1
デイ	36*	1	0**

\*\* $p<.001$ , \* $p<.05$

Table 8 これからは

	肯定	中立	否定
施設	11	1	4**
在宅	16	1	0
デイ	32	5	1

\*\* $p<.001$ , \* $p<.05$

「私が不安に思うことは…」の項目に対して差がみられた ( $\chi^2=8.440$ , df=4,  $p<.05$ )。残差分析により施設群の肯定反応が有意に多く、在宅群の否定反応が有意に多いという結果が得られた。また「私がうらやましいのは…」の項目で差がみられた ( $\chi^2=11.590$ , df=4,  $p<.001$ )。残差分析により施設群の中立反応が多い結果が得られた。結果をTable 9, 10に示す。

Table 9 私が不安に思うことは

	肯定	中立	否定
施設	4*	2	6
在宅	0	2	12*
デイ	5	12	23

\*\* $p<.001$ , \* $p<.05$

Table 10 私がうらやましいのは

	肯定	中立	否定
施設	5	2**	3
在宅	10	0	2
デイ	30	0	9

\*\* $p<.001$ , \* $p<.05$

以上の結果から、居住環境について考察をしていく。施設群の特徴として、「友だちづきあい」について否定的な回答が多かった。このことは、施設群の環境によるものと推測される。食堂に集まって同じものを食べ、共に入浴し、眠るといった共同生活から、日ごろ接している他者を友人としてではなく、同居者として捉えていると考えることができる。

「若いころ」は、他者との関わりが少ない在宅群が否定的で他者との関わりの多いデイ群が肯定的という対照的な結果となった。一概には言えないが、過去について振り返るとき、現在の自己の充実感や満足感が影響することがある。定期的な他者との関わりのあるデイ群は、自己が安定していたため、過去を振り返る際も肯定的に反応したのかもしれない。このことは、



「自己の現在イメージ」を尋ねる「よく人から」と「たのしみ」の項目において、デイ群に肯定が多いことと関連があると考えられる。

また、「たのしみ」の項目において、施設群が否定的な点は今後の課題になると考えられる。施設入居者は要介護者がほとんどである。身体の衰えによる生物的喪失を体験する中で、「たのしみ」が減少してしまうことはとても悲しいことである。施設入居者は年齢も高齢者が多いが、年齢の差異は第1節の結果からほとんどみられなかったため、加齢により「たのしみ」が減少したとも言えない。このことから今後、施設利用者の生物的喪失を考慮した上で、個々の「たのしみ」を共に探すという対応が必要になると考えられる。さらに、施設群が「これから」の未来イメージに否定的であることも、「たのしみ」を持って生活にメリハリをつけることで、未来を肯定的に捉えるようになるかもしれない。

しかし、このような結果の背景には、施設群には個別法で調査した者が多かったということが関わっていると推測される。調査者との関係が反応に影響したことが考えられるため、今後の課題としては、調査方法を統一して対象者とラポールを形成してから調査を行うことが挙げられる。

### 第3節 配偶者の有無

SCTの反応が配偶者の有無により差があるかを検証するため、配偶者無群と配偶者有群間で群(2)×反応(3)の $\chi^2$ 検定を行ったところ、5項目で差がみられた。

「私は、よく人から…」という項目で差がみられた( $\chi^2=4.717$ ,  $df=2$ ,  $p<.05$ )。残差分析の結果から、配偶者無群は肯定反応が少なく否定反応が多い、配偶者有群は肯定反応が多く否定反応が少ないということが示された。また「いつかそのうち、私は…」という項目で差がみられた( $\chi^2=6.175$ ,  $df=2$ ,  $p<.05$ )。残差分析の結果から、配偶者無群の肯定反応は有意に少なく、配偶者有群の肯定反応は有意に多いことが示された。結果をTable11, 12に示す。

Table 11 私はよく人から			
	肯定	中立	否定
配偶者無	13*	1	13*
配偶者有	31*	1	10*

\*\* $p<.001$ , \* $p<.05$

Table 12 いつかそのうち、私は			
	肯定	中立	否定
配偶者無	5*	2	12
配偶者有	17*	0	14

\*\* $p<.001$ , \* $p<.05$

「私が気になるのは…」という項目で差がみられた( $\chi^2=8.660$ ,  $df=2$ ,  $p<.05$ )。残差分析の結果、配偶者無群の肯定反応が少なく否定反応が多いこと、配偶者有群の肯定反応が多く否定反応が少ないことが示された。また「私が不安に思うことは…」という項目で差がみられた( $\chi^2=11.744$ ,  $df=2$ ,  $p<.01$ )。残差分析の結果、配偶者無群の肯定反応が多いこと、配偶者有群の肯定反応が少ないことが示された。結果をTable13, 14に示す。

Table 13 私が気になるのは

	肯定	中立	否定
配偶者無	1**	10	16*
配偶者有	13**	17	14*

\*\* $p<.001$ , \* $p<.05$ 

Table 14 私が不安に思うことは

	肯定	中立	否定
配偶者無	8**	4	13
配偶者有	1**	12	28

\*\* $p<.001$ , \* $p<.05$ 

「生きるということは…」という項目で差がみられた ( $\chi^2=5.256$ ,  $df=2$ ,  $p<.05$ )。残差分析の結果、配偶者無群の否定反応が有意に多く、配偶者有群の否定反応が有意に少ないことが示された。結果をTable15に示す。

Table 15 生きるということは

	肯定	中立	否定
配偶者無	12	3	15*
配偶者有	26	8	11*

\*\* $p<.001$ , \* $p<.05$ 

以上の結果から、配偶者の有無について考察をしていく。「よく人から」という項目に対し、配偶者無群は否定的反応、配偶者有群は肯定的反応が多いという対照的な結果となっている。配偶者無群の大半が、身近な人物と死別体験をしている。よって、自身が人からどう見られているかを伝えてくれる他者を喪失しているために、肯定的に想像することが難しくなっていることが推測される。

「いつかそのうち」という項目では、配偶者有群は肯定的反応が多かった。今後、夫婦で共に何かをやりたいという回答が多く、未来についても配偶者と共に過ごす自己を思い描いているように感じられた。配偶者無群でも家族や趣味を生きがいに未来をイメージする者もいたので、配偶者の有無が未来イメージに直接関係するとは言いがたいが、配偶者の存在が自己を捉える上で大きな影響を与えるということは言えそうである。

「生きること」に関する項目では、配偶者無群の否定的反応が多いという結果となった。このことは、配偶者というパートナーを失ったことで生じる淋しさが表れていると推測される。特徴的であったのは、配偶者無群は反応語数が長いということであった。「人と語る」という場が少ないために、このような結果になったと考えられる。今後、このような配偶者無群の心の支えとなるような対象を、共に探すことが求められると考えられる。十分に語る相手と語る場を設けることが今後の課題となりそうである。

#### 第4節 性別

SCTの反応が性別により差があるかを検証するため、男性群、女性群間で群(2)×反応(3)の $\chi^2$ 検定を行ったところ、7項目で有意な差が認められた。

「友だちづきあいは、私にとって…」の項目で差がみられた ( $\chi^2=10.675$ ,  $df=2$ ,  $p<.001$ )。残差分析の結果、男性は肯定反応が少なく否定反応が多い、女性は肯定反応が多く否定反応が少ないことが示された。また「若いころ、私は…」の項目で差がみられた ( $\chi^2=7.944$ ,  $df=2$ ,  $p<.001$ )。残差分析の結果、男性の中立反応が有意に多く、女性の中立反応が有意に少ないことが示された。結果をTable16, 17に示す。

Table 16 友だちづきあい、私にとって

	肯定	中立	否定
男性	6**	1	7**
女性	52**	1	9**

\*\* $p<.001$ , \* $p<.05$

Table 17 若いころ、私は

	肯定	中立	否定
男性	1	9**	3
女性	21	18**	23

\*\* $p<.001$ , \* $p<.05$

「よく思い出すことは…」の項目で差がみられた ( $\chi^2=8.084$ ,  $df=2$ ,  $p<.001$ )。残差分析により、男性の肯定反応が有意に少なく、女性の肯定反応が有意に多い結果となった。また「もし私が若かったら…」という項目で差がみられた ( $\chi^2=5.202$ ,  $df=2$ ,  $p<.05$ )。残差分析により、男性の肯定反応が有意に少なく、女性の肯定反応が有意に多い結果となった。結果をTable18, 19に示す。

Table 18 よく思い出すことは

	肯定	中立	否定
男性	0**	7	5
女性	22**	20	10

\*\* $p<.001$ , \* $p<.05$

Table 19 もし私が若かったら

	肯定	中立	否定
男性	6*	2	4
女性	40*	3	6

\*\* $p<.001$ , \* $p<.05$

「私が気になるのは…」という項目反応に差がみられた ( $\chi^2=5.420$ ,  $df=2$ ,  $p<.05$ )。残差分析により、男性の中立反応が多く否定反応が少ないこと、女性の中立反応が少なく否定反応が多い結果が示された。さらに「生きるということは…」という項目反応に差がみられた ( $\chi^2=6.863$ ,  $df=2$ ,  $p<.05$ )。残差分析により、男性の中立反応が多く、女性の中立反応が少ない結果が示された。結果をTable20, 21に示す。

Table 20 私が気になるのは

	肯定	中立	否定
男性	2	8*	2*
女性	12	19*	28*

\*\* $p<.001$ , \* $p<.05$

Table 21 生きるということは

	肯定	中立	否定
男性	4	5*	5
女性	34	6*	21

\*\* $p<.001$ , \* $p<.05$

「私のたいせつなものは…」という項目反応に差がみられた ( $\chi^2=6.230$ ,  $df=2$ ,  $p<.05$ )。残差分析より、男性の肯定反応が少なく否定反応が多いこと、女性の肯定反応が多く否定反応が少ない結果が示された。結果をTable22に示す。

以上の結果から、性別について考察していく。「友だちづきあい」の項目で、男性は否定的反応、女性は肯定的反応が示された。このことは星野 (2001)<sup>(9)</sup>の結果とも一致している。この結果は性差の役割によるものと考察することができる。現在の高齢者男性は戦争に行った経験がある者が多く、女性は家庭や地域に残り生活を任されていた。このような歴史的背景から、女性は若いときから

Table 22 私のたいせつなものは

	肯定	中立	否定
男性	9*	3	1*
女性	48*	5	0*

\*\* $p<.001$ , \* $p<.05$

他者や友人との関わりを持つ機会が男性よりも多かったため、今回の結果になったと考えられる。また、男性は仕事を退職して社会的喪失を体験することで、友人関係が変化するが、地域に根付いて家庭を守っていた女性はそのようなライフイベントもなく、昔からの友人関係を維持することができたとも考えられる。さらに、女性は平均寿命が長いことから、夫（男性）と死別した後、友人関係を築く機会が男性に比べて多いとも考えられる。

「たいせつなもの」を尋ねる項目では、男性は否定的反応、女性は肯定的反応が多いという対照的な結果となった。男性が「たいせつなもの」について否定的に反応したことは今後の課題となると思われる。「たいせつなもの」は自分が守りたいもの、守っていききたいものである。それが否定的ということは、守りたいものが少ないということであると推測される。高齢者男性は退職という社会的喪失を経験し、生きがいや役割を失ってしまっている可能性がある。さらに、下仲・中里（1999）によると、男性は加齢と共に家族・親子関係が縮小していくが、女性は家族・親子関係が拡大していくといわれている<sup>13)</sup>。そのため家族・親子関係の縮小により、たいせつなものが減少しているとも考えられる。今後は、退職後の高齢男性に対して、生きがいや役割を担うようなはたらきかけをすることが必要になるであろう。

## II. 個別事例の質的分析

I では、高齢者の反応を量的に分類し、「数量的処理」を用いて考察を行った。ここでは、個人事例から質的分析を行うことで「直感的洞察」を行う。数量的分析では見落とされてきた個々の反応を、幅広い視点から理解し、一人ひとりがより生き生きと暮らせるような関わり方を考えていくことが目的である。

方法としては、SCT35項目の中で、最もその人らしさが表れている項目のみを抜粋し、特に考察したい3名の事例から人物像や自己概念を考えていく。この3名は、施設群・デイ群・在宅群から抜粋した。数量的分析では扱えきれなかった、その人らしさを筆者が特に感じた3名である。

考察の便宜上、質問項目の順番を入れ替えてある。本来の質問項目の順についてはTable 1 イメージと質問項目を参照されたい。

**事例1：**Aさん（特別養護老人ホーム利用者・92歳・女性・在所年数2年2ヶ月・配偶者無・家族2名）

Aさんは施設群・高年齢群・女性・配偶者無群に分類された。Aさんの特徴的な反応を以下に示し、考察を行う。

私はきょうだいと 皆大事にしてくれる

私の子どもは 私を大事にしてくれる、うれしい限りです

家の人々は、私を 見舞いに来てくれて感謝している、家族の中に入れてよかったなあと思う

夫と私は 一番大事な人、亡くなったとき「世界中で一番大事や」と言って泣きました、良い人だった

よく思い出すことは 夫のことはよく思い出す

友達づきあいは、私にとって 話せる人は一人

年をとると 自分一人でできないのがはがゆい

ときどき、私は 死にたくなる

私のいいところは 人がいいところ、人の悪口を言わないところ、人を大事にするように心がけている

今の私の生活は 最上です

このような反応から、人を大事にするように心がけ、家族や周りの人への感謝を忘れず、今の生活を最上と述べたAさんの心の安定が見られた。そこには今は居ない夫との良好な関係が見られる。しかし、気になる点としては、友達づきあいについて話せる人が一人ということである。この中に施設内での友人関係の築きにくさが表れているように感じられる。また身体の衰えとともに自分一人できなくなることのつらさからか、死にたくなることもあるようである。このような、できないというはがゆさに寄り添う人間関係を施設内で築いていくことが今後の課題となりそうである。

## 事例2：Bさん（デイサービス利用者・69歳・男性・配偶者有・家族2名）

Bさんはデイ群・低年齢群・男性・配偶者有群に分類された。Bさんの特徴的な反応を以下に示し、考察を行う。

家の人びとは、私を いつも立ててくれる、ありがたいと感謝している、常に姿勢を正さねば私にとって社会（世の中）は 間違いだらけだ、しかし一人でもそれに立ち向かっていかねばいけない

私がうらやましいのは 人に踏まれてもなお気丈に咲くタンポポのような生き様

私はきょうだいと 仲たがいしているが、いつか仲直りしなければと思っている

私がよく思い出すことは 両親の面倒を充分みられなかったことだ、姉や妹に感謝している

私が失ってさみしいと思うものは 信頼だろう、一度失ったものは中々回復出来ない、特に信頼は友だちづきあいは、私にとって そんなに大きな比重をしめていない、なぜなら、一人で処すること好きだから

私は、よく人から いい人だとよく言われる、人と分け隔てなく付き合うこととまごころで対応しているだけなのに

これからは 人とのつながりが一番大事だ、できるだけ多くの人と付き合いたいものだ

ときどき、私は 人にあたっては絶対いけないといつも反省する

今の私の生活は 家内と二人で生活をエンジョイできている、お互いを尊重し合っているか

からこそ続いているのだ

私のたのしみは 子どもたちと孫たちの成長を見守ることだ

いつかそのうち、私は 一人で過ごすことに慣れるための準備を始めなければならないだろう

死というものは そのための事前準備は多少考えておく必要があると思っている

もし私が若かったら こんなこと、あんなことやりたいと思うことはない

私が生きている喜びを感じるのは 今日一日無事で過ごせ、朝目が覚めて、あっ健康で今日も始まると思うとき

生きるということは 生かされていることと同じだ

私の人生は 生かされてありがたく思っている、神仏の教えは私の人生そのもの考える

これまでは 本当に順風満帆でやってこれた、これは神の導き以外ないと考えている

このような反応から、常に姿勢を正しながら毎日を一生懸命生きているBさんの生き様が感じられる。友だちづきあいはあまり重視しないものの、人とのつながりを大切にし、まごころを込めて人と付き合うBさんの心の強さを感じた。また、妻に対しての尊重を忘れず、悪を正していこうとする信念の裏には、信仰の支えがあるように感じられる。生かされているという神仏の教えをもとにして、自分の死について逃げることなく捉えているBさんには、一本の筋が通っているように感じられた。妻や子、孫を大切にしているBさんだからこそ、両親の面倒を見られずにきょうだいと仲たがいでしまったことは後悔として残っているようだが、その体験をポジティブに捉え直し、今の家族に対して温かく接していることはBさんらしく、とても素敵である。家族や配偶者との関係が、自己概念には大きく影響するようである。

### 事例3：Cさん（衣料品店顧客・65歳・女性・配偶者無・家族1名）

Cさんは在宅群・低年齢群・女性・配偶者無群に分類された。Cさんの特徴的な反応を以下に示し、考察を行う。

若い時、私の家庭は 苦しく、子沢山のため、働くことしかなく、楽しい思い出は一つもない

これまでは まあ何とか細々と生きてこれた、これから先はどうなるか？

ときどき、私は このまま何歳まで元気でいられるのだろうか

今の私の生活は 最低のところである、しかしこれ以上に最低最悪で生活している人が多くいると思う

これからは 無駄をなくしつつましく生きていくこと

年をとると 先が思いやられる、病気が増える、年金が少なくてどう生活すべきかと悩む  
生きるということは 金と体力どちらがなくても難しい

私にとって、社会（世の中）は 住みづらい

私の人生は 苦しみの連続だった

若いころ、私は あれもしたい、これもしたいと思っていたが、今はそれがしたくてもでき



なくなってきた

いつかそのうち、私は 人生何か一つでも成功をおさめたいと思いつつ…

もし私が若かったら もう一度頑張ってチャレンジしたいことが多々ある

友だちづきあいは、私にとって 生きていく上で必要な存在である

私は、よく人から 若いね、元気やねと言われるが、見た目だけでつらい

死というものは 誰にでも来るもの、せめて人様の手をわずらわせないように頑張りたい

私がうらやましいのは 男に生まれていれば人生もう少し変わっていたかもしれない

このような反応から、独居暮らしのCさんの苦しさやつらさを感じとることができる。これから先のことを不安に感じ、金と体力のどちらがなくても生きることは難しいと語る。Cさんにとって、世の中は住みづらく、最低のところまで踏ん張っている叫びが聞こえてくる。また、男性であったなら人生が変わっていたかもしれない、と当時の男尊女卑の様子が推測される。友だちは生きていく上で必要だと語りながら、見た目だけでつらいとも語っており、本当のCさんを理解してくれる人はいるのだろうか。人様の手を煩わせないようにと必死に頑張るCさんの孤独を感じる。「もう一度頑張ってチャレンジしたいこと」を実現させるために、私たちは何ができるだろうか。人間関係を築いていくというソフト面だけでなく、経済的援助というハード面のサポートも今後益々重要になってくると考えられる。現在の自分の生活や身体によって、自己概念の捉え方は変わるということを改めて感じさせられた。そして、表面的ではない家族や友人との関係の重要性を感じた。

年齢・性別・居住環境・配偶者の有無が異なる3名を取り上げて比較するだけでも、その人らしさや自己概念は大きく異なっていることが考察できた。

しかし、本研究では喪失感を尋ねる項目において、参加者から具体的な返答が得られなかった。「私が失ってさみしいと思うもの」と「私のたいせつなもの」という尋ね方では、現在から未来にかけての時制であるため、喪失感が表れなかったのではないかと考察する。「私が失ってさみしかったもの」と「私のたいせつにしていたもの」という項目であれば、喪失したものを記せたのかもしれない。現在から過去へ向かう質問にするのか、未来へ向かう質問にするのかで、返答に違いが出ることが推測されるため、今後の調査では質問項目の言語表現についても吟味する必要があると考える。

## 第4章 ま と め

本研究における「数量的分析」と「質的分析」において、高齢者の様々な自己概念を支えているのは、家族や友人との親密な関係と、自分が表現できる場があるかという点であると考えられた。

私たちは、高齢者一人ひとりが豊かに生きていくために、何ができるのだろうか、そして自

分がその立場であったなら何をしてもらいたいただろうか、一人ひとりのSCTにおける反応（語り）から、様々な可能性を考え、推測していくことは、我々の自己概念にも影響を与えてくれるだろう。我々よりも多くの体験をしてきた高齢者に学びながら、失ったものだけでなく得てきたものを感じ、一日一日を大切に生きていきたい。

〔注〕

- (1) Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. (1986). Vital involvement in old age. OR : W. W. Norton & Company, Inc. 朝長正徳・朝長梨枝子(訳) (1990). 老年期—生き生きしたかわりあい—. 東京：みすず書房, 57.
- (2) 古谷野亘 (2002). 現代日本の高齢者観. 老年精神医学雑誌, 13(8), 877-882.
- (3) Newman, B. M., Newman, P. R. (1988). Development through life. OR : W. W. Norton & Company, Inc. 福富護(訳) (1995). 新版 生涯発達心理学—エリクソンによる人間の一生とその可能性—. 東京：川島書店, 492-503.
- (4) 梶田叡一 (1980). 自己意識の心理学. 東京：東京大学出版会, 62-80.
- (5) 小林哲郎 (2007). SCT（文章完成法テスト）とSCT-B. ロールシャッハ法研究, 11, 79-80.
- (6) 佐野勝男・槇田仁 (1989). 文章完成法テスト解説（新訂版）—成人用—. 東京：金子書房.
- (7) 下仲順子・村瀬孝雄 (1975). SCTによる老人の自己概念の研究. 教育心理学研究, 23(2), 104-113.
- (8) 下仲順子 (1988). 老人と人格—自己概念の生涯発達プロセス—. 東京：川島書店.
- (9) 星野和実 (2001). ライフサイクルにおける老年期の心理社会的発達と人格特性に関する研究. 東京：風間書房, 130-131.
- (10) 森麻友子 (2004). 高齢者にみられる精神的特徴に関する臨床心理学的考察. 佛教大学教育学部学会紀要, 3, 183-200.
- (11) Erikson, E. H., Erikson, J. M. (1982). The life cycle completed : a Review. OR : W. W. Norton & Company, Inc. 村瀬孝雄・近藤邦夫(訳) (2005). ライフサイクル、その完結—増補版—. 東京：みすず書房, 188-190.
- (12) 中西信男・鐘幹八郎 (1981). 心理学10—自我・自己—. 東京：有斐閣, 107-114.
- (13) 下仲順子・中里克治 (1999). 老年期における人格の縦断研究—人格の安定性と変化及び生存との関係について—. 教育心理学研究, 47, 293-304.

〔参考文献〕

- 伊藤哲司・能智正博・田中共子 (2005). 動きながら識る、関わりながら考える—心理学における質的研究の実践—. ナカニシヤ出版, 82-87, 142-152.
- 上里一郎 (2001). 心理アセスメントブック第2版—Handbook of Psychological Assessment—. 新潟：西村書店, 281-289.
- 坂野雄二 (2006). 臨床心理学キーワード—補訂版—. 東京：有斐閣双書.
- 佐藤有哉 (2008). 質的データ分析法—原理・方法・実践—. 新曜社, 71-73.
- 下仲順子 (1980). 青年群との対比における老人の自己概念—世代差、性差を中心として—. 教育心理学研究, 28(4), 303-309.
- 下仲順子・村瀬孝雄 (1976). 加齢と性差よりみた老人の自己概念. 教育心理学研究, 24(3), 156-166.
- 下山晴彦 (2005). よくわかる臨床心理学. 東京：ミネルヴァ書房.
- 莊村多加志 (2006). 新版社会福祉士養成講座2—老人福祉論第4版—. 東京：中央法規出版株式会社.

中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司 (2006). 心理学辞典, 東京: 有斐閣.

Leick, N., Davidsen-Nielsen, M. Healingpain: attachment, loss, and grief therapy, OR. 平山正実・長田光展 (訳) (1999). 癒しとしての痛み—愛着、喪失、悲観の作業—. 東京: 岩崎学術出版社, 19-20

〔付記〕

本研究は、多くの方々の協力を得ながら作成することができた。調査協力して下さった対象者の方々、そして指導教員の先生に深くお礼申し上げます。

(くさの かなみ 教育学研究科臨床心理学専攻修士課程)

(指導: 松瀬 喜治 教授)

2009年9月30日受理

